

# 私の履歴書

谷口吉生

東京大学本郷キャンパスの7号館。米國から帰国した私が1965年、工学部都市工学科教授の丹下健三先生を訪ね、研究室に入れていただいた。日本と米國で8年間を大学で過ごし、再び大学に戻ることにした。しかし、当時の大学院はプロフェッショナルグループで、とりわけ丹下研究室は東京五輪で代々木の体育館を設計、後に大阪万博の計画をするなど国家的プロジェクトに参加していた。

## 海外プロジェクト多忙

「原宿の月」夜更けまで仕事

## 丹下研究室

先輩の磯崎新氏、渡辺定夫氏、建築家マルセル・ブロイヤーが体育館を手掛け、米国人ランドスケープ・アーキテクトのローレンス・ハルプリンが2つを結びつける広場を設計。建築家らにかなり多くの経緯を得た。



米國の事務所で丹下先生（奥）と

「本当にアメリカに行ったの？」と母に不審がられた。丹下健三・都市建築設計研究所（URTEC）が設立され、東京・原宿のビルにある事務所にも通った。近所1週間休んで仲間と勉強し、合格。その後、見知らぬ人から受験資格を得た。初め、私は浮いた存在だった。URTECを主宰した神谷宏治氏、独立しつつ丹下研を手伝っていた磯崎さん、後に都市工学科の教授となる渡辺さんら主に東大建築学科出身の仲間がそう中、留学から帰ったばかり。そんな私に親切に建築の実務を教えてくださいました。先輩諸氏には今も感謝するほかない。（建築家）

# 私の履歴書

谷口吉生

留学時に住んだボストン、丹下健三先生の下で修業中に仕事でたびたび訪れたサンフランシスコなど、私は美しい港町と縁が深い。坂のある港町では町並みと海が同時に視界に入る。青く輝く水面が町の先に広がり、夕暮れ時には町も海も赤く染まると、アフリカ大陸の最南端、南アフリカのケープタウンもそんな色彩の変化が繰り返される港町だ。1970年、私はケープタウン大学に客員として招かれ、半年間ほど教職に就いた。東京大学の丹下研究室を視察した同大教授の東京での案内役を務めたのがきっかけだ。当時の日本と南アとの往来

## 母校ハーバードで2度

昼間は指導 夜は自分の図面

「郵便局などの公共施設には異なる人種が利用するたために2つの出入り口があり、バスも1階と2階に座席が厳密に分けられている。日本人は貿易相手国として、どちらへも自由に出入りできる特別な立場を与えられていたがゆえに、かえって複雑な気持ちになったことを覚えている。ケープタウン大学の後も、



ケープタウン新聞の取材を受けた

41歳の誕生日の日、教室に入ると突然学生たちが歌い出し、私が設計した建築を模したケーキが現れたのはうれし

# 私の履歴書

谷口吉生

「計画・設計工房」を立ち上げたのは1974年のことだ。ハーバード大でも教えを受けた建築家の横文彦氏が事務所をアルバートをして、最初のスタッフになった。

## 事務所を設立 初の作品

中庭を屋根ない居間空間に

## 雪ヶ谷の家

後年、日本大学教授にもなるが、現在に至るまで私の事務所に支えてくれている。



「雪ヶ谷の家」(新建築社写真部提供)

「雪ヶ谷の家」。細い路地を入ったところにある小さな正方形の家で、床と壁を白いタイルで覆った中庭を中心に置いた。中庭を屋根ない居間空間に。子供は職場である東京工業大学に自転車よく遊びに行った。戦中に塗った迷彩色のまだらが外壁に残る建心がけている。（建築家）

「雪ヶ谷の家」(新建築社写真部提供) 満足いく仕事を続けるためには、事務所を大きくしてはいけない。これは父の最大の教えだ。事務所を丸の内に移して公共建築を数多く手掛けるようになった。父は信頼をおく5、6人の社員と最後まで仕事を共にした。私の事務所も必要に応じて大勢のコンサルタントと協働するが、いまも父と同じ程度の小さな所帯を守っている。そして建築が出来るまで、そのプロセスに自分自身が直接参加するため、多くても2つ以上の設計を同時に引き受けられないように心がけている。（建築家）

# 私の履歴書

谷口吉生

収蔵庫の設計ならば吉生に任せてみようか。父は若い私に機会を与えようと思っただろうか。資生堂ギャラリーのアドバイザーを務め、1962年に銀座の資生堂会館を設計していた父を通じて仕事が舞い込んだ。静岡県の掛川工場内に「収蔵庫」を建てるという計画

## 上空から見るとS字形

外観は銀色 目に付く建築に



上空からみた「資生堂アートハウス」©Yukio Futagawa

「国立代々木競技場」に代表される建築の構造的な表現も主流にある。私はどちらにも属さない新しい建築を目指した。私の作品を「構造が率直に表れていないけれど、いい建築だ」と評した建築家の林昌三氏の言葉が当時の傾向を物語る。ハーバード大の客員講師として米國にいた私に代わって高宮眞介君と父は現場を見守り、竣工式にも出席してくれた。父の重病のこの形とメタリックシルバーに輝く色は、敷地の目の前を走る東海道新幹線がヒントになった。最寄りの掛川駅が出来る前のことで列車は猛スピード

明治初めに創業した同社は19年にギャラリーの母体となる「陳列場」を設け、芸術家に発表の場を与え、同時に作品を収集。自社製品の化粧品パッケージやポスターなど保存してきた資料も増えたため新たな収蔵場所が必要になった。当初は収蔵庫だけ

この2つの大きな円と正方形を少しずらして併置し、細長いエントランスホールに結ぶ案を、美術評論家の今泉篤男氏が参加する委員会が発表する。こんな声が上がった。「上から見るとS字形、美と美術館を併置したような施設として、周辺を整備して工場環境形成に貢献する方針を提案し、認められた。敷地は静岡市と浜松市の中

物に入り、プラスチックや菓品のにおいがする化学研究室の前を抜けると建築の研究室にたどり着く。父は喜んで私を迎え、設計中の図面を見せたり、キャンパスにある戦前のデビュー作「水力実験室」の話をしたりする。満足いく仕事を続けるためには、事務所を大きくしてはいけない。これは父の最大の教えだ。事務所を丸の内に移して公共建築を数多く手掛けるようになった。父は信頼をおく5、6人の社員と最後まで仕事を共にした。私の事務所も必要に応じて大勢のコンサルタントと協働するが、いまも父と同じ程度の小さな所帯を守っている。そして建築が出来るまで、そのプロセスに自分自身が直接参加するため、多くても2つ以上の設計を同時に引き受けられないように心がけている。（建築家）